

## 平成十八年度

## 埼玉大学国語教育学会大会・シンポジウムを振り返つて

山本 良

平成十八年十二月二日、埼玉大学において埼玉大学国語教育学会大会並びに総会が開催され、大学院生による研究発表と学外から二名の研究者を招いてのシンポジウムが行われた。シンポジウムには、都留文科大学より田中実教授と鶴田清司教授の二人をお招きし、さらに本講座からは戸田功教授が加わって、「文学と教育をめぐつて—〈研究〉という視座から—」というテーマのもと活発な議論がかわされた。

初めに司会者である私がシンポジウム企画の意図を簡単に説明した。文学と教育とは、一九四〇年代以降〈言語教育か文学教育か〉という問題として鋭く対立する一方、国語教育は文学なくして成立し得ないとする立場も長く提唱してきた。しかしながら、学習指導要領が言語教育の立場を明確にしている現在、この対立は一定の結論に（即ち言語教育としての国語教育に）達したというのが大方の見方であり、また日本社会全般において見ても、〈文学〉の必要性の低下は明らかである。他方で、

純愛小説やケータイ小説の流行、美しい国を語る新書のベストセラー化など、混迷する社会情勢の中で、人々の〈物語〉への欲望は高まるばかりである。そんな状況下で、あらためて〈教育〉にとっての〈文学〉のあり方を根本的に問い合わせるならば、というのが当時の問題意識であった。シンポジウムにお呼びしたのが、言語技術教育の論客鶴田氏と新たな文学教育の提唱者田中氏という対蹠的な立場のお二人ということもあって、多くの方が興味深い討論になることを期待していたのではないだろうか。

各シンポジストの口頭発表も、こちらが提起した問題意識を共有していたように思われる。まず鶴田氏は、現今の学習指導要領が掲げる教材選定の基準に疑問を投げかけ、例えば「『んぎつね』はそのような基準からすれば決して〈有益〉なものではないが、複雑な分析にも応え、多様な解釈が引き出せる豊かなテキストである、と述べられた。発表の過程で、実際の小学

四年生による解釈文が示されたが、大変に深い読み取りに会場から驚きの声がきかれた。

「ごんぎつね」は「村の茂平」から聞いた話、即ち村落共同体に伝承されてきた物語、として構造化されていることは疑いなく、そのため共同体の価値観に回収された美しい愛の物語であるとはいえるが、それはあくまでも美しい伝承の「物語」にすぎず、少なくとも「小説」ではなく、近代文学の問題を背負つてもいい、と反論された。田中氏は冒頭、教材としての価値は自分にはわからない、と述べられたが、発言の端々からは教材としての「ごんぎつね」の価値を疑問視する含みも感じられたようだ。

本学の戸田氏は、「ごんぎつね」に対する「居心地の悪さ」に言及された後、死生觀の厳格でない文化においてのみ児童もさほど抵抗なく読み得るのかもしれないが、本来「ごんぎつね」は大変な悲劇であり、読みようによつては児童の内面を傷つけかねないほど深刻な物語であると述べ、それを平氣で読ませるというのは児童を「他者」として指定してないからかもしれない、教育の現場における「他者」とは第一義的に「教員」とつての児童生徒であるはず、といった趣旨の発表をされた。

「ごんぎつね」の解釈をめぐつて児童同士の他者性が露呈するという鶴田氏の発言、テキストを読者にとつての関数として定義する田中氏の理論とあいまつて、論議は文学と教育の問題から教育における「他者」の問題へと進んでいった。いずれにしても数時間のシンポジウムで安易な結論が導かれるような問題ではない。ただ文学を専門領域としている立場から気になつ

たのは、教育に文学が要請されるのは、どのような理由で、またどのような状況でなのか、という根本的な問題であった。「物語」とは反復する構造を備え、それゆえ受け手に安心を与えるものであるが、文学体験とは、つまるところその対極にあり、比喩的に言えば自己と世界との間に裂け目を生じさせるような行為である。田中氏が論じられていたのも専ら「小説」であり、それは「物語」の対義語であるわけだが、教育の現場においては「物語」が要請されることもあるのではないか、という疑問を禁じ得なかつた。

例えれば、「ごんぎつね」の結末部の続きを自分なりに創作するという授業では、瀕死のごんを抱えた兵十が医者のもとへ駆けつけ命を取り留めるといった物語をつむぐ児童も少なくないという。思うにこれは、物語から受けた悲しみを自己治癒的に回復しようとする嘗みではないのか。もちろんそのようにして児童がつむぐある種画一的な物語がつねに肯定されるわけではないが、一人一人の児童を教員にとつて不透明な存在と見なし、その実態を注視した場合、画一を否定できない瞬間もあるはずだ。広義には「物語」への欲望すらも文学現象に他ならないが、「物語」に耽溺するのはおそらく文学体験のあるべき姿ではない。その意味で、画一的な物語の許容は、文学教育でも、ましてや言語教育でもない。しかし、教育の現場における児童の複雑な様相を想像するとき、教育における言語や文学の覇権が問題なのではさらさらなく、それゆえ臨機応変に、ダブルスタンダード、トリプルスタンダードをも敢えて厭わぬという教員の姿勢こそが要請されているように思われてならなかつた。